

## 【よみがえり】

忍者ごっこのとき、ぼくはいつも、黒の上下を着るのですが、懐爺いわく、  
「忍者は黒い服なんか着ません」  
絵本でも漫画でも、黒い服着てると反論すると、  
「あれは本物の忍者を知らない作者が書くからで、黒い服は夜お月さんが出ると、  
反射して目立ってしまうんです」  
と云う。  
なるほど、そんならどうすればいいかと聞くと、  
「忍者はふだんは農作業をやっているから、金ちゃんが農作業を手伝うときの服が  
いいんじゃないでしょうか」  
と云う。  
さすがは懐爺、忍者小説でも書いたらいいと進言すると、  
「そういうものを日本一沢山書いたが、出版する前に火事でみんな焼けてしまいました」  
と云う。  
懐爺ほどの人が、火にくべても燃えない紙で、どうして書かなかったのか不思議  
でした。  
たぶん、自分で燃やしたに決まっています。

そのとき懐爺に聞いたのだが、忍術に、  
「忍定（にんじょう）」  
という技があるそうで、つまり、絶体絶命のときの、死んだふりである。  
これは、得意です。  
じっさいの忍者は、切腹して、死んだふりをするそうですが、死なない程度に腹  
を切る。  
これが難しく、まちがえて切りすぎて、腸が飛び出すことがあるらしい。  
そうなったら元も子もないし、切腹しなくとも死んだふりはできるので、ぼくな  
んかは、息を止めて、白眼をむく。  
そうやるとぼくは、体質的に脈も止まるので、みんなは、本当に死んだと大騒ぎ  
します。  
まあ半分は死んでいるのと同じなので、よほどからだを強く叩かれないと、生き  
返らない。

あるとき、それは息苦しいほど乾燥したときでしたが、死んだふりしたぼくがな  
かなか生き返らないから、葬式をしなきゃというので、棺桶に入れられて山寺まで  
運ばれました。  
どういうわけか耳だけは聴こえていて、烏が、  
「ぎゃあぎゃあ」

鳴いて、  
「食わせろ食わせろ」  
と騒いでいます。

ぼくの母親も、  
「ぎゃあぎゃあ」  
泣いて、

「蘇れ蘇れ」  
と騒いでいます。

すると、棺桶担いでいた村のおとなが、石につまずいて棺桶を落としてしまいました。

「いてて、なにするんじゃ」

と、ぼくが生き返ったのは云うまでもありません。